

地球の秘蹟

ペーター・セルク

コロナ・パンデミックは明るい空から来るのではない。現代社会の不十分なエコロジーの観点に対する自然からの回答と理解される。変化への地球の呼び声である。それをルドルフ・シュタイナーの指摘から語る責任ある学者が認めている。

《Monde diplomatique》(世界の外交)誌の3月号に、US アメリカの科学ジャーナリスト、〈パンデミック：追跡する接触伝染、コレラからエボラとその彼方〉(ニューヨーク 2015⁽¹⁾)を書いた作家ソニア・シャーが、〈コロナウイルスはどこから来るか?〉⁽²⁾というタイトルの注目すべき論文を書いている。彼女が強調しているのは《パンデミックによって益々多く私たちが傷つきやすい深い原因をもっていること：つまり生活空間の加速的な破壊があることを認識することである》。シャーはその論文の中で、多くの新たに生まれた20世紀、21世紀の病原体についてHIVからエボラ、コロナウイルスに至るまでこの出来事の状態を書いている。そして多くの種の破壊された生命空間と、病原体を人間の住居の近くに運ぶ動物の回避を書いている。《エボラはそのよい例であるが、ウイルスの起源としては様々なコウモリが確認されている。2017年に行われた研究は中央-西アフリカの領域にウイルスの爆発がしばしば起こっていることを示した。ごく最近では森が静かに焼かれ、コウモリの木々が倒され、私たちの庭や農場の木々に逃れるようにコウモリに強いている》。蝸(ブヨ)や蚊によってうつされる病気の場合にも、ソニア・シャーはエビデミー(流行病)の登場と伐採との関係を指摘し、更にはマダニ・ヒメダニによる病気等も同様である。彼女は更に《生活空間の喪失だけが病気発症の危機を大きくしているのではなく、人間の消費のために用意された動物とも係わっている》ことを上げている。シャーは不法取引又はいわゆるウエット・マーケット-そこでは生きた、又は新鮮な屠殺された動物が取引されている、そして屋外の自然の中では決して出会えないような動物が物理的に近くで扱われている(《そして微生物はあちこちへ喜んで飛んでゆく》。) -について報告している。- 《こうして2002/03年に、SARS(重症急性呼吸器症候群)流行の元となったコロナウイルスは発生することができた。それは新しいコロナウイルスの原因でもありうる》。シャーはまた、産業的な肉の生産システムの中で、屠殺場の死の前に狭い空間に詰め込まれ、微生物から死の病原体への変化を発生させる理想的な条件を導き出し、なお多くの更なるエビデミーと潜在的なパンデミックへの道について説明している。

狭い空間に表現されるこの関係は恐るべきものであり、同時に印象的でもある。それらは現代における多くのものがそうであるように、包括的な文明の危機を示し-益々多く人間に逆襲し、決定的な方向の転換なしには人々を困窮と苦しみに導く、間違った反エコロジーの政治の結果を示している。

《あらゆる環境規制とそれ以外の規制から産業を解放しようとするトランプ政権の努力はアメリカでは避けようもなく、益々多く生活空間が破壊されることへと導くであろう。それがまた動物の微生物を人間へ伝搬することを助けている…》。

《最も恐ろしい病原体》

中でもアントロポゾフィー医学では、バクテリアやウイルスは充分誠実には受け取られていないように言われている。しかしそうではない。ルドルフ・シュタイナーは既に舵がきかなくなった《パチルス(桿菌)恐怖》と《衛生》-強迫観念を《現代の迷信》⁽³⁾として批判的にのみ言及したのではなく、《人間生活の破壊》⁽⁴⁾となり《恐ろしいエビデミー》を⁽⁵⁾もたらす《最も恐ろしい病原体》⁽⁶⁾の危険な

現実を警告した。彼はそれをそのままにしなかった。—それを想起することは現代では重要である。シュタイナーの全集の中には繰り返しバクテリアと《バチルス(桿菌)》(その下にシュタイナーは日常語としてウイルスを包括した)に対抗するために、対応した栄養と生き方⁽⁷⁾により人間の内的抵抗力を強めること、しかし、内的な魂的-精神的な態度⁽⁸⁾によってもそれを強化することがいかに重要かの指摘が繰り返し見られる。晩に《不安》と《唯物論的志向》をもって入眠すると、病原性の活性化のために栄養の基盤を偏在的にひろめる萌芽を用意する⁽⁹⁾、とシュタイナーは言う。不安によって、また憎悪や恐怖によって人間は個人または共同体の全体を弱め、より大きなエビデミーの登場を可能にする⁽¹⁰⁾。彼は諸講演の中で《虚偽、中傷、偽善》のような文化的習性と伝染病の発生との更なる関係を描写した。それはエレメンタルな諸力の世界⁽¹¹⁾の変化によって媒介され、—あるいは世界的に広がったフェイク・ニュースと数年来のあらゆる種類の誹謗等の雰囲気を目にして考えるべき指摘である⁽¹²⁾。《バチルス(桿菌)》はシュタイナーによれば、ある点では正に《物理的に受肉した虚偽のデーモン》⁽¹³⁾と見られる。—その際注意すべきは、ここでは人間の個人的な問題について語られるのではなく、破壊的に作用する文明の《虚偽》についてである。(創造的な国土全体の破壊をもたらす、その思いやりのない消費生活の様式と、それ自身虚偽の《外面化社会》の不誠実なシステムも同様である⁽¹⁴⁾)。中でもルドルフ・シュタイナーは《バチルス(桿菌)》を《アーリマン的存在》⁽¹⁵⁾であり、反ミヒャエルの現象形態⁽¹⁶⁾と語った。1917年10月14日、彼はより多く劇的な19世紀の過程で、超感覚的世界でのミヒャエルのアーリマンとの闘いとアーリマンの敗北及び《地上に投げられた》ことを、この関係において次のように語った：《そのような戦いがあった。(…) それによってこのアーリマンの一群は地上に投げられた後に、今日地球のあらゆる住人が医療生活の中ではバチルス(桿菌)と呼ぶものを地球の領域にもたらした。バチルスの力として示される全てはバチルスが関わっており、かつてアーリマンの一群として天から地上に投げられたもので、竜が打ち勝ち、アーリマン-メフェストフェレスの思考-方法が70年代の終わり以来その場をえている勝利の結果である。その結果、物理的な領域では結核とバチルス病とが今、精神的-魂的な領域に存在している悟性の唯物論(国家主義的、人種主義的な思考)と似た起源をもっている；(この)事柄は高次元の意味でひたすら同じ事柄にたとえられる。》⁽¹⁷⁾

時代の印ははっきりした言葉を私たちの周囲で語っている。自然は変容しつつ私たちに誠実な問いを立てている。私たちが思考を変容させようとしているかどうか、私たちが混乱と苦しみから破壊ではなく、人間の精神化が宇宙の要求として私たちに現れてくるか、を私たちが認識しようとしているかどうかの問いである。—イタ・ヴェーグマン

この種の内容的な関連は日常意識にとっては、はるかに異質であるが—シュタイナーによれば、その関連は何百年となく、ローゼンクロイツァーのような隠れた共同体の中でのみ心を動かされるものである。(《ヨーロッパのあらゆる秘密のシュレーレでは、近代のバクテリア病の全体は類似の起源をもっている。バチルス病は、その霊的起源に還元される。それはローゼンクロイツァーとこのことが教えられるほかの秘密のシュレーレにおいては、エソテリックな伝統である。》⁽¹⁸⁾) 唯物論的思考方法—人間の自己と世界観を考慮して—とそのような態度の結果として実践される文明的な生活様式の間で成立する関係を理解すると、精神的な出来事のダイナミズムに対するシュタイナーの発言は邪道どころではないように見え、—それをソニア・シャーの叙述の背景の註として読むことができる。1912年4月17日のストックホルムの講演と1912年の5月9日のケルンでのエソテリックな時間の中で(驚

き、愛、良心の力からの《人類の代表》の彫刻の創作についての最初の発言の1日後に⁽¹⁹⁾ ルドルフ・シュタイナーはしかも肉の大量消費のための動物の虐待と、バチルス（桿菌）の登場とバチルス（桿菌）によって登場する病気の間に成り立つ関係を指摘した⁽²⁰⁾。

イタ・ヴェーグマンと地球の秘蹟

〈ナチュラ〉誌（〈精神科学的人間学による医学の拡大の為の雑誌〉）の4年目の第一号を、イタ・ヴェーグマンは1929年の初め—ルドルフ・シュタイナーの死後4年弱に、〈地球の秘蹟〉というタイトルを与えた自分の基調論文で開始した⁽²¹⁾。ヴェーグマン曰く、新しい年の号で問題なのは《新しい思考》に注意を促すことであり、次の未来にどうしても《路》が開かれなければならない、ということである（《人類の発展は同時に地球の発展である。そして新しい思考は既に人間にやってきている。重要なのはあらゆる生活領域でそれを勇気をもって捉え、一貫して実践することだけである。》）ヴェーグマンはいわゆる〈ナチュラ〉誌の論文において、ルドルフ・ハウシュカの〈パンと地球〉、ハーバート・ハーンの〈パンと意識〉、ワルター・ヨハネス・シュタインの〈地球の変容〉、リリー・コリスコの〈パンと水銀〉を発表し、自らも根本的な方法で人間と、人類と地球との関係について書いていた。《地球は人間の発展の舞台である。しかし今初めてそうになった。というのは深い根底において人間は精神的—魂的な起源であるから。人間の肉体は精神的—魂的なものに対してただの被いにすぎない。この被いの発展は、地球人間の、地球の環境の歴史である。》ヴェーグマンの文章はアントロポゾフィー医学の100周年に詳しく学ばれ、その最も重要なテキストに疑いもなく属する。—彼女がその中で《メルキュール（水星）》という古代の《魂の道案内》と今日の《認識の提供者と行為の鼓舞者》のために書いたものを考慮してもそうである。その叙述の最後の部分でヴェーグマンは今日のミヒャエル時代における再受肉とカルマのキリスト的な直観に入っていた。《繰り返された地上生と人間の運命についてのみ語られるのではなく、（この文化の意識時代には）人間同士と地球との関係》について語っている。《この教えのキリスト化とは、地球の運命が人間の運命の中に組み込まれて認識されていることの中にある。》今生きている人類は地球という天体全体の運命に対しても益々責任を感じなければならない。《近代人は地球を全体としてその交通と情報網によって張り巡らすことを始めた。近代人はそれを本質的には外的に今日もなお全く占取している。それによって近代人にとっては、以前はまだ決して存在しなかったことが生まれてきている：つまり全体としての地球への運命の関係である。それは益々意識的に見通されなければならない。》古代世界は極めて限定された責任を人間に課していた。そして世界の指導を本質的には神々に委ねた：今や人類はそれでも地球全体の存在及び未来に対する責任を担っている。まず鋭く分離された《自然のプロセスと歴史の過程は益々隔合し始める。古代の時代にはそれが個々に当てはまる。素晴らしいルネサンスの街ヴェニス、かつてはダルマティアの山を森として被っていた海上の杭の上に立っている。この森の伐採は上昇する気象変動を生み出した。そこで小さな例として観察されることは、より大きな例として未来に説明なしに実現されるであろう。》人類が正当である責任を逸すると、近い未来に自然現象に向き合い《人類はなるほど、自分で生み出すけれども、自分で生み出すものとは認識しない》説明できない現象が登場するであろう。これまでは永遠の法則に秩序付けられているように見えた自然は一見混乱に陥るであろう。《私たちは事実、この世界状況の入口に直接立っている。自然は人間の混乱した振舞いの鏡となる。それが破局と異常性に現れる。人間は自分自身の鏡像をその中に認識することなく自然の鏡の中にそれを見る。》

イタ・ヴェーグマンはこの一文を 1928 年末に書き、それを 1929 年の初めに出版した。3 つの土星のリズムを経た 90 年以上も前に。人類はその間、彼女によって描かれた時代の《入口》に立つのではなく、すでにそのただ中におり、ごく最近の過去と、現実的な現代の出来事の中にそれを読み取ることができる。《それが破局と異常性に現れている…》— 気象変動の現象に、またその全ての結果に、急速な種の消滅に、地上の生命の基盤の破壊に、エビデミーにおける人類の内的外的《気象》に〈グローバル化した世界に〉現れている。《自然は人間の混乱した振舞いの鏡になる。》

ソニア・シャーは〈Monde diplomatique〉にこの《混乱した振舞い》とその結果の観点を書いている。はっきり見られるのは、その関係と責任とは気象の領域又はたとえ全ての精神的背景においてではないにしても《人間によって作られた》エビデミーの領域においてである。結果はしかし、地球と地上の人類にとって遅すぎないように、早急にその決着がつけられなければならない。イタ・ヴェーグマンの言葉の中に《はっきりした言葉が私たちの周りで時代の印を語っている。自然は変化しつつ私たちに、私たちが思考を変容させたいと思っているかどうか、私たちが認識したいと思っているかどうか、混乱と苦しみから破壊ではなく、宇宙の要請として人間の精神化が現れてくることを認識しようとしているか、という誠意ある問いを私たちに立てている。》

アントロポゾフィーと精神的な世界と人間の理解はその際迫りくる意味をもっている。地球の救済と治癒にとってこれまで以上に実際的で必然的な意味をもっている⁽²²⁾。大きな全体としては、実際的な歩みが重要であり、地方においても一混沌とした危機の中では、否定しえない《自我の行為》が重要である⁽²³⁾。

注

(1) <https://soniashah.com/pandemic-the-book/> を参照。

(2) https://monde-diplomatique.de/media/demo/woher_kommt_das_coronavirus.mp3 および <https://www.thenation.com/article/environment/coronavirus-habitat-loss/> を参照のこと。

(3) ルドルフ・シュタイナー『専門科学とアントロポゾフィー』（1920/21 年）GA73a、ドルナッハ 2005 年、166 頁

(4) ルドルフ・シュタイナー『どこで、いかにして精神を見出すか？』（1908/09 年）、GA 57、ドルナッハ 1984 年、193 頁。

(5) ルドルフ・シュタイナー『エソテリックの基本要素』（1905 年）、GA 93a、ドルナッハ 1987 年、233 頁。

(6) ルドルフ・シュタイナー、『エソテリッシュ・シュトゥンデの内容から』（第一巻：1904-1909 年）、GA 266a、ドルナッハ 2007 年、414 頁。

(7) ルドルフ・シュタイナー『どこで、いかにして精神を見出すか？』（前出）193 頁と『統一国家から三分節化された社会有機体組織へ』（1920 年）、GA 334、ドルナッハ 1983 年、43 頁を参照。

(8) ルドルフ・シュタイナー『どこで、いかにして精神を見出すか？』（前出）194 頁。

(9) ルドルフ・シュタイナー『いかにして精神界の理解を獲得するのか？ 死者の世界からの霊的衝動の流入』（1914 年）、GA 154、ドルナッハ 1985 年、47 頁、『私たちの死者 スピーチ、追悼の言葉、メディテーションの箴言』（1906-1924 年）、GA 261、ドルナッハ 1984 年、15 頁。

- (10) ルドルフ・シュタイナー『エソテリックの基本要素』(前出) 233 頁、『いかにして精神界の理解を獲得するのか?』(前出) 47 頁。
- (11) ルドルフ・シュタイナー『自然存在と霊的存在 可視界における彼らの作用』(1907-1908 年)、GA 98、ドルナッハ 1996 年、240 頁。
- (12) アルブレヒト・ミュラー『僅かに信仰 後からすべてを問う 自分で考える 操作をいかに見抜くか』フランクフルト・アム・マイン 2019 年を参照。
- (13) ルドルフ・シュタイナー『ローゼンクロイツナーのテオゾフィー』(1907 年)、GA 99、ドルナッハ 1985 年、72 頁、ルドルフ・シュタイナー『霊的存在の人間への働き』(1908 年)、GA 102、ドルナッハ 2001 年、206 頁。
- (14) ステファン・レッセニヒ『私達の隣の洪水 外化社会とその実践』ベルリン 2016 年参照。
- (15) ルドルフ・シュタイナー『私たちの死者』(前出) 16 頁。
- (16) ルドルフ・シュタイナー『エソテリックの基本要素』(前出) 234 頁、ルドルフ・シュタイナー、『エソテリッシェ・シュトゥンデの内容から』(第一巻) (前出) 256 頁及び 414 頁。
- (17) ルドルフ・シュタイナー『外的世界の霊的背景 闇の精神の墜落』(1917 年)、GA177、ドルナッハ 1999 年、162 頁。
- (18) ルドルフ・シュタイナー『エソテリックの基本要素』(前出) 233 頁。
- (19) ペーター・セルク『エディス・マリオン、ルドルフ・シュタイナーとドルナッハのキリスト彫刻』ドルナッハ 2018 年、21 頁。
- (20) ルドルフ・シュタイナー『死と新生の間の生に関するオカルトな研究 生者と死者の間の生きた相互作用』(1912-1913 年)、GA 140、ドルナッハ 2003 年、139 ページ、ルドルフ・シュタイナー『エソテリッシェ・シュトゥンデの内容から』(第二巻: 1910-1912)、GA 266 b、ドルナッハ 2010 年、372 頁及び 374 頁
- (21) イタ・ヴェーグマン『地球の秘蹟』(ナチュラ 精神科学的人間学による医学の拡大の為の雑誌) 第 4 年、1929-30 年、1-6 頁に掲載。ピーター・セルク『無我の文化』に再載されている。ルドルフ・シュタイナー『第五福音書と極端の時代』、ドルナッハ 2006 年、87-98 頁。テキストは、www.wegmaninstitut.ch にも掲載されている。
- (22) この点では、ギュンター・ヴァクスムートの科学的先駆的著作『地球と人間-その造形力、リズム、生命のプロセス』(1945 年) も参照のこと。彼は、400 ページ以上の記述で地球を生きた有機体として紹介した。1951 年の第 2 版の序文でヴァクスムートは、人間は《そのような生命プロセスのより大きなつながり》、それらの外因性と内因性の衝動、ダイナミクス、リズムについて十分な洞察力を持たずに益々《地球全体と生物のさらなる領域での影響》を解体していると書いている。しかし地球は《複雑なシステム》をもつ球体であり、被いを持つ《地球》は、賢明に構成された《生き物》に属する《身体》であり、その全体性をさらに理解し、保護していかなければならない。この点では、ピーター・セルク 気候変動 グレタ・トゥーンベリと私たち アーレスハイム 2020 年を参照。
- (23) フリードリヒ・ドルディンガー『雲を貫き輝くもの』を参照。黙示録的な状況の中で霊的なミヒャエルの共同体の生存を扱った 1930 年のドルディンガーの劇が、2019 年に注釈付きで新しく復刻された。(イタ・ヴェーグマン研究所出版部)

(上松佑二訳)

Das Goetheanum, 27.März 2020